

大きく変動する社会の中で、 宗門子弟をどのように育成するか

日蓮宗宗務院教育課長 赤堀正明

1. 青少年と宗教

オウム真理教の問題は、現代の日本社会における多くの陥穽を浮き彫りにした。特に、戦後の学校教育の中で醸成された若者の行き場のない不安感を焙りだした。

ここに高校一年生、山野井創君が記した「素人の宗教」という、オウム信者に対する率直な感想がある。

ひとりで無視することは不可能である。何故なら、僕も、社会に生きているからだ。社会全体の風潮は、一個人ではどうとできるものではない。そんな時に、オウムの信者は“教祖様”に逆らう事ができたであろうか。僕らでさえ、僕らの教祖様—常識—に逆らう事はできていない。そうであれば、あの事件は、単なる宗教団体の暴走と見ていく事はできない。僕らは、それほど頼りない空間に生きているのである。

山野井君の作文の中には、オウム真理教信者への共感と同情、社会に対するどうしようもない無力感が読みとれる。この二点を貫いているのは、自らを含む同世代を支える思想信条の脆弱さであり、自らの置かれている社会の不確かさ、不安感である。

若者の無力感、不安感が横溢した結果については、オウム真理教に高学歴、特に理科系専攻の者が多かったことと密接に関係している。すなわち、若者は科学的合理主義に基づく教育への反動から、非合理へ指向し、オカルトへ強く傾斜したのである。彼らは管理化された社会の中で無気力化し、偏差値重視により個性は軽視され、マークシート方式のテストで思考力は低下した。テレビ

やテレビゲームは虚構に現実以上のリアリティーを付加し、若者たちは今、心身のバランスを失い、自己を喪失し、不安と多くの疑問を抱え、虚構の空間で迷っている。こうした閉塞状況を打開するために、彼らは宗教を強く意識している。大学キャンパス内でサークル活動頻いに宗教活動を行い、その活動に生き甲斐を見出している若者もいる。そうした若者たちが新々宗教に惹かれて入信していく動機として、体育（本来は身体と心の調整をはかる教育）・徳育の欠落、超越のアイテム・宇宙モデルの喪失などが主だったものとしてあげられる。これらは戦後の学校教育に欠如している部分で、本来は宗教教育によって担われなければならない。では現在、教育としての仏教はいかなる様相であろうか。

近代仏教学が始まって百年以上が経過し、仏教学は、知識の累積により対象を分析研究実証する对象的思惟を特色として、仏教の客観的理解と普遍化に貢献した。しかし、その反面仏教本来の戒定慧の三学による全人的思惟の方法が等閑視されるに至っている。前者を知識による理解、後者を智慧による理解とするならば、知識偏重、智慧軽視の教育が仏教教育として行われてきたことになる。智慧重視の教育とは、対象を判定するのではなく、そのもの持っている特質・個性を発見重視し、生かす方向を把持する教育である。このことの欠如が、現在における僧侶の社会への適応力の低下や、社会に対する仏教的視点からの発言が低下している最大の要因ではなからうか。ここに、仏教教育の問題が指摘されうる。

こうした学校教育と仏教教育に欠如している点が、今後の宗門子弟教育の中に組み込まれ、補完されていく必要がある。宗門子弟も、オウムの信者や不安を抱える多くの若者たちと同じ世代に生きる青少年である以上、若者たちが宗教に対して抱えている要求に目を向け、それに対応することによって、はじめに宗門子弟の教育について補うべき点が明視化されてくる。

ここで、青少年の宗教に対する干渉について、日蓮聖人の教義からどう応答

システムとして機能できるかを三大秘法によって考えてみる。

戒壇は徳育・体育に相応し、心身の調整をはかる。武道・気孔などの修得によりその発揚は促される。本尊は宇宙モデルを提示し、人類の企画を明確にする。また、題目は超越のアイテムを希求する若者に手掛かりを与える智慧の源泉である。体育を通して戒を、音楽を通して定を、文学・造形・芸術を通じて慧の修得に至ることにもなる。

今後は仏教が社会に機能するためにも、彼らの要望を知り、そこに立脚した教育というものを実践していく必要があるのではなかろうか。

しかし、現実はどうかという、新々宗教が台頭し、仏教をはじめとする既成教団を批判する中、我々は、それに対応してはいない。また、世界の宗教地図が塗り変えられようとしている現代、日本の既成仏教教団は何をしているのだろうか。宗教が、その方向を錯誤するのは、社会の動勢を無視することから始まり、墮落は社会に無批判に迎合することから生まれるのだ。

2、「仮称日蓮宗行学林」について

以上のことを検討した上での試案として、宗門の子弟教育に向けて「仮称日蓮宗行学林」という構想が提案された。

宗門の教師養成の現状と問題点は、教師になる以前、教師になる時点、教師の資格を得て以降の三期に分けられる。現行教育の問題点として「基本方針」「指導者」「養成機関」が欠けているため、既存の宗門関係各教育機関・僧堂などでの教育・修行が「統合」「体系化」されず、その結果各機関が相互の連帯を欠き、単に個人の知識・技術の習得の場としてしか機能していない。こうした問題点を解決するための試案が、法器養成プログラムの中核をなす行学林構想である。基本的コンセプトは、一年間の教程の中で、年中行事を習得すると共に教学・教化学・教化実習・法式実習を柱としたカリキュラムを組み、教える側と教わる側が生活を共にし、全人的な触れ合いの中で信仰を深め、一人一

人の能力を伸ばすための宗教教育である。

特色をいくつかあげると、全寮制を敷き、指導者と学林生が共に生活すること、一般の教師にも公開し、聴講制度を設け、生涯教育を扶助すること、宗門の教師候補生を同時に養成することにより教団内の団結力を高め、個人・寺院・教団の目指す方向性を統一すること等があげられる。カリキュラムは一年間で日蓮宗僧侶としての基本事項を修得できるように、声明・読経といった法要式部門はもちろんのこと、教化学概論・教団論・儀礼論・教育学・心理学・カウンセリング・教化実習等の教化学をはじめ、易学・ニューサイエンスといった一般学部門まで幅広い科目を自由に選択できるように設定し、応用力を高めることが可能となる。講師も研究者・実践者・一般人を按配し、多分野にわたる交流も積極的に企てる。また、立正大学や身延山大学とのカリキュラムの互換性を保つことも考慮されている。

こうした意見のように、これからの宗門子弟の養成は、従来の教育システムをより進化させたものでなければならず、信仰の基盤となる教養の修得、法儀の修得と寺院実務の研修はもとより、現代社会に対応し得る教化学と教化実践、一般学の習得といった現代社会の多元化に应答できる新しい試みが必要とされるのではあるまいか。

結び：仏教教育の現状と課題をめぐって

身延山大学学長 仲 澤 浩 祐

現代を特徴づけるものは、教育的側面からいえば、学歴社会と学校化社会である。高校教育においては、管理教育が増長し、偏差値教育を重視した輪切り選別教育が行われ、生徒たちは自らの意志に反し、不本意に各差づけられた大